



TITLE:

The Nuclear Magnetic Resonance in Magnetic Materials

AUTHOR(S):

杉山, 清寛

CITATION:

杉山, 清寛. The Nuclear Magnetic Resonance in Magnetic Materials. 物性研究 1983, 39(5): 262-262

ISSUE DATE:

1983-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/90828>

RIGHT:

を紹介した。

(文責 渡辺豊)

The Nuclear Magnetic Resonance in Magnetic Materials

東大・物性研 安岡 弘 志

安岡先生の講義は夏の学校の後期、7月29、30日の両日にわたって、戸隠宝光社、小谷旅館で行なわれた。先生は、9月に開かれるICMの準備のため、大変御多忙中であるにもかかわらず、我々の願いを快く引き受けて下さったのである。

NMRの分野は、測定方法という意味では、その手法はほぼ確立しているのであるが、その結果は、現在、興味を中心である諸現象にわたっている。また、その応用は、多岐にわたっており、専門外の分野からも興味が寄せられている。その意味で、基本的な測定方法から、専門的な up to date の話まで、講義の対象となってくるのである。その点今回の安岡先生の話は、初日にテキストを交え、測定方法の基本的な話をわかり易く行い、2日目には、MnSi という Sample をとり上げて、NMRの測定が、非常に奥の深いものであることを示すという様に、M1～Dコースの学生、専門外の研究者まで、満足できる、すばらしい講義であった。

特に2日目には、最近脚光を浴びつつある μ SR (μ -on, spin Rotation, μ -on spin Relaxation, μ -on spin Resonance) についてもその測定方法と、結果の見方について、解り易くふれられている。講義の中心は、これらの測定方法を使って、MnSiの物性、特に spin のゆらぎというものを、どのようにして明らかにしてゆくか、という点におかれ、MnSiの物性を理解してゆくとともに、NMRの結果の見方が学習されてゆくというものであった。

講義の最後は、磁性サブゼミの「spinのゆらぎ」に重なってゆくもので、磁性サブゼミまで参加した学生にとっては、さらに有意義な講義であったように思う。(文責 杉山清寛)

サブゼミーマモルファス 「アンダーソン局在」

今回も昨年に引き続いて若手の発表を中心とし、講師を特に頼まなかった。発表者及び題目は次のとおりである。

25日 高木春男(名大・理)

「アンダーソン局在と超伝導」